２０１０年１２月３０日～１１年１月２日

聖岳・上河内岳山行記録

早川　尚武（単独行）

序　章

１０月以降、全然山へ行けていなかった。いきなり本番では当然不安も大きいので、申し訳程度ではあるが、トレーニングの積もりで、日帰りで富士山へ行ってみた。

異常気象も、今や恒常的となってしまい、相変わらずの少雪と気温の高さである。2,000m越えても雪がほとんど無い。下山時、砂走りが本当に走れた。昔だったら、この時期は雪が無くても凍っているのに・・・。

こんな気象状況でコワイのは、いきなりのドカ雪。このまま暖冬傾向で年を越すのか、はたまた、ドカンと降られるか。年末まで気掛かりな事であった。

3,400m地点より山頂を望む

１２月３０日

飯田ＩＣよりほぼ１時間。００：２０便ヶ島到着。聖光小屋の前はやたらに広い駐車場。ここまでの道は落石が多く、運転にはかなり神経を遣う道なのに。そんなに車が入ってくるのかなぁ。天候は今のところ快晴。星が瞬きもせず、冷たく光っている。テントを張ってひとまずの休息。

５：００起床。爪の先の様な細い月が、夜明け前の暗い空に懸かっている。月齢24.4。

起きた時には晴れていた空が、出発する頃には急速に雲が出始めた。天候の変化が非常に早い。気持ちが落ち着かないままに出発する。

６：０５出発
６：４７西沢渡　７：００発

谷間から、上河内岳が見える

林道を歩いている時にはまだ、周りの景色が見えていたが、尾根に取り付き、しばらく登っている間に、早くも雲に隠れていく。天気予報は元より悪い。明日・明後日の行動をどうするか、迷い続けている。

１０：１０　1,800m地点
１１：１０　2,000m地点

長い登りだ。高度が上がる程、疲れも出てきて登高が捗らない。天気はますます悪い。気持ちも上向かない。

途中、２・３のパーティーとすれ違い、状況を聞いてみた。風強く、稜線ではトレースがすぐに消えてしまうとの事。パーティーによっては、聖岳に、登れたり登れなかったりしているようである。

１４：００　稜線・分岐点

すでに、今居るのは厚い雪雲の中。降りしきる雪に視界も失った。小屋までのトレースも、降り積む雪に消えている。ラッセルする気も起きないので、薊畑の平坦地にテントを張って、行動を打ち切った。これから長い夜の始まりだ。長々し夜を、独りかも寝む、ってか。状況はちっとも文学的じゃないんだよなぁ・・・。

１２月３１日

夜来風雪の声。吹き荒び、テントを揺らす風と雪の音に一晩中脅かされて､眠りは浅い。予報では、３１日も悪天候だったので、明るくなったら退路を確保するか、もう少し状況が良かったら、ルート工作するか、と色々考えていた。いずれにしても、周りに他の登山者はいない。下ってきた人の情報では、少し早く２人ほど入山しているようではあった。小屋にいるのだろうか。不安を募らせる。

５時頃、一度外を見た時は、まだまだ雲の中だった。どうしようかなぁと、ぐずぐずしながら６：３０起床。もう一度外を見たら、これまたびっくり。快晴である。あわてて朝食を摂り、身支度をして外に飛び出した。ちょうどそこへ、小屋から来た２人組のパーティーが通りかかる。テントの固定が甘い。固定し直して、彼らの通過から３０分程遅れて出発した。

陽が昇った頃には、すっかり晴れていた

峠の我が家

６：３０　起床
８：２０　出発

先行者がラッセルしているところへ追い付いた。声を掛けて交代する。少し年上のご夫婦であった。広島から新幹線に乗って来られた、との事であった。

慌てて飛び出したので、余分に着込んだままだ。しばらく登ると汗をかき始めたので、服装を直す。その間に先頭を交代する。それとなくタイミングを計りながら、ラッセルを交代しつつ進む。山慣れている人は、一々声を掛けなくても、お互いに呼吸を合わせられるので、非常に楽なものだ。判断のタイミングもドンピシャ。これが独りぼっちだったらどこまで行けてたものか。本当にありがたい。

新雪の稜線に刻む自分のトレース。自分の後ろが道であり、行方は自分の意志である。冬山へ惹き付けられる理由であろう。

ところどころ、文字通りの崖っぷちのルートを辿る。慎重に、慎重に。

１０：３３　2,662m　小聖岳

小聖岳のピーク下、森林限界線でワカンを外す。同行者も同時に同じ判断を下す。いよいよアイゼンとピッケルの世界。風が強い。時折雲がかかる。まだ、天候は安定し切っていない。

聖岳山頂に雲が巻いている

次第に山頂が近づいてはいるが、そう簡単には辿り着けない。息も上がってくる。弾む呼吸を整え整え、氷雪を蹴り込む。見上げる山頂には、風に雪炎が舞い狂う。氷点下の陽炎。心が吸い込まれていく。

山頂直下は、広い斜面。目印も無い。視界不良時には、相当に神経を遣わないといけないだろう。時々振り返りつつ、下山のルートを確認する。派生している違う尾根にでも迷い込んだら、それこそ一大事だ。今晴れていても、いつガスに巻かれるか分からない。

１２：１３　山頂到達

　この日登ったのは我々３人だけだ。気分がいいものだ。でも、吹きっさらしの頂上での長居は、ちょっとキビシイ。あまり景色を眺めている余裕が無かった。今思い出しても、残念に思う。

赤石岳

上河内岳

大沢岳・中盛丸山

１２：４３　下山開始
１３：２０　2,662m　小聖岳
１４：３２　薊畑・天場

上河内岳遠望

樹　氷

　一旦、聖平まで足を延ばす。どうせトレースなど有ろう筈はないが、とりあえず、上河内岳方面のルートの様子を偵察しに行く。天候も、また変わりそうであるし、ずっとラッセルとなるとちょっとツライ、ここは独り身って事で、縦走は諦めてしまった。まだまだ修行が足りないなぁ・・・。
　１５：２０、天場に再び戻ったところで、何パーティーか登り付いたのが遠目に見えた。そのうちの３人組は、と言えば、どうやら白土パーティー。顔形が隠れていても、雰囲気と言うか、気配で分かるもの。しばらく到着を待ってご挨拶。明日のルート、作っておきましたよ。なんだか、公共工事だな。
　その夜も風があり、ガスが掛かっている。それでも時々、雲の切れ間に星がきれいに見えている。明日も晴れてくれるだろうか。

１月１日　元旦

５：３０起床　しばらく写真撮影
７：４５出発

月齢26.4。夜明け前の暗い空に、細い月が残っている。晴れだ。予定通り起床する。

天気が良く、景色がきれいなので、しばらくカメラを手に遊んでしまった。白土パーティーは、朝早く６時には通過して行った。この辺は性格が如実に出ているのだな。真面目な人は、当然行動も堅実。こっちは、まさにキリギリス型だね。

聖岳モルゲンロート

光岳・黎明

聖平からは、新雪の道。自らを叱咤する様に、躊躇せずに足を踏み入れる。最初は思ったほどに積雪は深くなかった。しばらくは広い斜面の登り。地形を読みながら、少しずつ右手西寄りの尾根筋にルートを近づける。膝下程度のラッセル。予想よりも軽くて助かった。

次第に地形が細くなり、稜線の上に出た事が分かる。まだ樹林帯の中。雪が膝上まで深くなってきた。兎の足跡が点々と、左右に交錯しながら続いている。それを追っているのだろうか、狐のものらしき足跡が続いている。どこか不思議に感じるのが、なぜか狐の足跡が、真っ直ぐに続いている事。まるで行き先を案内しているかの様。まさか化かしはしなだろう。宮沢賢治も、狐に化かされた、なんて言っているのは、本当は臆病だったり、お酒に酔ってよろよろしていた人なんだよって、作品中で書いてたしね。でも、本当に道案内の様に続いている。もちろんルート判断をしながら進んでいるが、なんだか誰か一緒に登っているみたいで、とても心が和んだ。

時々深雪に苦しむ場面もあったが、順調に前進している。振り返れば、トレースに逡巡の跡が無い。よしよし上手いぞ、と自画自賛。

９：００　2,650m地点　森林限界線

森林限界線を切ったところで、ワカンを外す。足にアイゼン、手にはピッケル。物の具に身を固め、抜刀、出陣の兵ってところだな。などと、なんだか人に言っても通じない事を考えながら、もう一度気を引き締め直して頂上を目指す。雲が出てきてしまった。切れない。雲が切れてくれない。雲の中に呑み込まれ、視界が閉ざされていく。

ここまで来て、ようやく登山道の目印があった。雪が凍り付いた斜面に、うっすらと夏道が見え隠れしている。それもすぐに消えてしまったが。

上河内岳の山容は、遠目に見ても奇怪な二重山稜の登路である。夏道は山頂を外している。西側の稜線通しで進み、山頂直下で直登とするルートを頭に描く。視界はあっと言う間に悪化した。西側は断崖となっている。踏み外せばこの世とのお別れ。来世の事は、まだ考える積もりはない。一足一足、探りながら登り詰めていく。

2,702m南岳で、少し右手に方向を変える。傾斜が緩くなる馬の背。クラストしているのでトレースが付かない。地形の特徴や、目標物を頭に入れる。下山時に方向を誤りやすい。振り返りつつ、周りを観察しつつ、詰めていく。頂上直下、視界が極めて悪い。登りはなんとかなる、下りだ、問題は下りだ。

１１：５３　2,803m　上河内岳山頂到達

山頂と思しきところにようやく辿り着いたが、のっぺりとした地形をしているので、ノコノコ歩き回っていると迷子は確実。見える景色が無ければ長居は無用。逃げるようにして下山にかかる。

樹林帯の、トレースがはっきりと付いているところまでは、相当緊張させられた。ところが、ここまで来れば、と思った場所に着いたら本格的に雪が降り始めてしまった。ウカウカしてたらトレースが埋まってしまうかも知れない。焦りに焦って、ほとんど休憩も取らずに元の道を駆け戻る。雪の中にしっかりとトレンチが切られている。我ながら上出来、と思いはしつつも、気は焦る。

１３：２４　聖平
１３：４８　薊畑

聖平に着いた時にはヘロヘロになってしまっていた。自業自得、朝にさっさと出発していれば良かっただけの事。アリさんを見習いましょう。

１月２日

５：００　起床　７：０６　出発
７：１６　分岐　休憩　７：２６出発
７：４６　2,200m地点
９：５２　西沢渡
１０：３０　便ヶ島

見返りの峰・聖岳

「悪漢」上河内岳

結局、今回も上河内岳では、何も見る事ができなかった。以前に、残雪期に縦走した時も、天気が悪くてガスに巻かれ、いつの間にかに山頂を通り過ごしてしまった山だ。憎らしい相手である。またいつか、今度こそやっつけてやらねばならぬ相手だ。

上河内岳。昨日の悪天が嘘のように、不敵な笑みを浮かべて鎮座している。帰り着いた林道から、ちょっと悔しい景色が目に入った。

今回山行の本来の計画は、易老岳までの縦走であった。結局計画は断念して、ピークハントに終わってしまった。自分の力量不足、判断力不足、その他色々な事柄、山が教えてくれた山行であったと思う。やはり、山は一度ではなかなか終わらない。

終　章

それから１週間後の連休に、子連れで京都へ「修学旅行」

人生是日々勉学道
一寸光陰不可軽

色々と良い体験をして、良い目標ができた年の初めとなりました。ありがたい事です。

石庭「虎児渡河の図」